
海里の果て

黒霧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

海里の果て

【Nコード】

N6222Y

【作者名】

黒霧

【あらすじ】

ちよつと未来風の世界。人がいなくなり、人に作られた機械は「はて、どうしたもんか」といいながら暇を潰すことにした。そんな一人である所の僕は、今日も駅で暇してる。あーだれかこないかなー。

孤高の月

白亜の髪。青い瞳。

月を射るように見上げている、一人の少女。

「……ほんと、いつまでそうしてるんだか」

ぼやくのは僕。

息をつけば白いもやがふわりと膨らんだ。けれど冬にふさわしい凍てついた空気は瞬く間に白を消し尽くす。その向こうには錆びた線路と、分厚い布を重ねみたいなの不格好な海がある。押し寄せる潮騒に塗れた風は、ほんの少し塩辛い。

そんな景色を、ホームの上から眺めているのが僕の日課。……うーん。案外あの娘と大差ないかも。

「……」

電車はこない。来るかどうかは電車次第。彼らにだって気分がある。かつては勤勉の証書のようなだった時刻表は、錆びて崩れてずいぶん経つ。

「……はあ。わかった、降参」

こらえきれず、歩き出す。足下で身繕いをしていた黒猫が、ばかだにゃーと見上げてきた。うるさいバカで何が悪いといいわけを思いつつ、僕は彼女に歩み寄った。

「昔、月の美しさを歌うことで、恋を語ったと聞きます。なので、月を見ていれば恋を語れるようになるのかと」

無人の休憩室に招かれた少女は、そう言った。古びた丸い椅子に座ったまま、じっと湯気を上げるカップを見下ろしている。

早く飲めよと内心こぼす。

「今なら、そういうソフトを入れた方が早いのでは？」

「そうですね。よく言われました」

「入れたの？」

「いいえ」

「ふうん」

なら、それが彼女の趣味なのだろう。

現代において、僕たちには無限の暇時間がある。趣味は時間を結い意義に潰せる唯一の娯楽だ。

まあ。恋の理解に使うなんてのは、ちょっとロマンがすぎるけど。

「何で恋？」

「わたしを設計者に言われたので」

「ああ……もしかして、結構おばちゃん？」

「そうですね。作られたのは三百年前になりますか。もう主の子孫も誰も残ってはいませんが」

「仕事はなんだったの？」

「孫のお世話をしろと」

「どうだった？」

「整備士にはよくお世話になりました……」

「うはは」

遠い目をする。彼女の記憶は今ほどのあたりをさまよっているだろう。

「で、何故恋？」

「だから設計者に」

「雇い主とは別？」

「はい。わたしは設計者のいたずらでバグを仕込まれました。命題は一つ」

恋を知りなさい。そう、彼女の創造主は告げて。

まるで、間違えた親を猛進する雛のように、彼女は三百年さまよっているらしい。

「その途中で、雇ってもらったのですが」

「野良ドールは外聞悪いからねえ」

「それに整備も必要でしたし。やすいですよーと言ったらカモンと言われて」

「ファンキーな雇い主だったんだね」

「思えば、なかなかにてたらめな方々でした」

それは、そうだろう。人類生存時の記録をあたって、仮想人格が人間を教育する事を許可した国はどこにもない。

「最後はどういう別れ方を？」

「一族最後の者とは老衰で。子供はいませんでした。もうあのころの人々は子供をほとんどつくりませんでしたから」

「自然消滅かあ。それじゃあ、財産として差し押さえられたんじゃない？」

「危ないところでした」

「逃げたか」

「もちろんです。……でも」

もしも、あの子が最後まで一緒にいてと言ったら、わたしは死んでもよかったけれど……。

そう言って少女はココアを含んだ。

白く透き通った光の溶けた、凍った空。

星か人類が消えてから、そろそろ二百年。

求められて生まれた僕たちは、求める物がなくなった世界で生き方を探している。

「にしたって、しぶといよね」

人の種子は絶えてしまったけれど、よもや彼らの作り出した物々がここまで意地汚いなんて、流石に考えていなかったのではないか。

「さて。そろそろ電車がくるみたいですよ。運がいい」

「最近は駅で待っていても電車がこなくなりました」

ホームにでて、遠くからごんごんとレールを震わせる電車の到着を待ちわびる。

僕は空に向けていた眼をおろすと、彼女に向けた。

「恋の正体は見つかりそうですか？」

「実のところ、もうわたしは体験しているのでは無いでしょうか」

「ほう」

「けれども、うまく認識できないようです」

それはまあ、そうだろう。

恋の正体は無意識であり、それはただ自分がどちらを向きたいかしか意味しないと、聞いている。

であるならば。

「まあ、追いかけてみればいいんじゃないですかね。それでよしと思えるまで」

「そうですね」

そうして。追いかけていった軌跡こそが、いずれ彼女の答えとなるだろう。

……そこで終わりにしてもよかったのだけど。

電車はまだ時間があるようなので、一つ、歌を教えてみた。

ずっとここにいる僕には歌うことに意味がないけど、線路を行く者ならそこそこの余興になるだろう。

「なるほど。ありがとうございます」

「このお礼はいずれください」

「え」

電車が到着する。一人で乗り込む彼女を、僕は黒猫と見送った。

立ち去る電車。どこまでも続く線路の上を歌が行く。

さて。月か死か。どちらともそうとは思わなかった彼女は、恋を何にたとえるだろう。

暇な駅バス

駅には時々電車以外の何かが来る。

で、そいつはひび割れたロータリイに入ってくると、石つぶてをばちばち弾いて透明のプラスチックの屋根の下に停車した。ぷしゅーとため息をついてドアを開けると……。

……まあ、中には誰もいなかったんだけどさ。

「昔から聞いてみたかったんだけど、なんで来るの？」

「そりゃまあ、他にすることもないですからねえ」

答えるバスはけだるそう。充電がそんなに心地いいのか。

「最近暇が増えて商売あがったりですよ。みなさんどうせ時間を潰すならと歩いてばかりなのですから」

かちかちと憤りにライトを点滅させるバス。けど、雨風にさらされた四角いボディはむしろ小さくなったように見えた。……ああ。昔の記憶と比較してたのか。そりゃ風雨にさらされれば小さくなるよね。

「もっと使ってくれませんかねえ」

ぼやきはいつものこと。僕は苦笑。いったいどれだけの僕たちがそれを思っただ事だろう。

その願いをかなえてくれる人間たちはもういない。

望まれて、助けるために生まれて、そう在る事に疑いなんか無かった日々。

ああ、なんて懐かしい理想郷。

なのに人間は、なんでいなくなってしまったんだろう。

「まあ。誰だって暇はいやだよねえ」

まったくですと答えるバスに、僕はただただ苦笑した。

流れ着く島

気が向いたので眠っていた

ら、起きろと言わんばかりの大音量が耳をつんざいた。

めきめきめきりごきやばきやと軽く大破壊を想像させる音は、デフラグ中だった僕を緊急起動させ、休憩室から駅のホームへと引っ張りだした。そして

「いやー。まだ生きてたんだな、お前ー」

海の方こうからやってくる、鋭角的な鯨^{ふね}を見た。

ゴミの島。なんて呼ばれた頃もあったとか。

当時。衛星削って資源枯渇に備え始めた人類はもはや地球の資源にさほど依存してはいなかった。放っておいても次々に生産される生活必需品。時間当たりの生産数一千万体とも言われるロボットたち。

いやーお前そんなにいるのかよ、なんて誰かつつこんだりしなかったのか。

ただでさえ、地球人工は年々減っていたというのに。

で。そんな中、肩落ち品や壊れたものが押し寄せて生まれたゴミの島。

相対的無限の資源。ゼロに近づく需要の曲線。あぶれた物達は錆びて色あせ軋みながらこの島にたどり着くのだった。

＊＊＊

てなわけで。堆積物で奇妙にうねり膨らんだ海をかき分けて、鋭角的なフォルムも勇ましい軍事用強襲揚陸艦がやってきた。三年ぶりくらいかなあ。

「いやー。まだ生きてたんだな、お前ー」

線路をまたぎ、フェンスをよじ登り、打ち捨てられた機械達の間から生えたたくましくもうっとうしい草をかきわけ海辺によれば、茶色い斑点をたくさん纏った老朽艦が待っていた。

「どうよ、今回は大量？」

船は答えない。……まったく。

仕方ないので、船の周りに漂う、新しいお仲間を観察する。

このあたりの海流を漂う廃棄品をまとめてひっさげてくるのがここ百年ほどのこいつの趣味だ。

で。その戦利品から掘り出し物を探すのが今日の目的なのだった。

「まーそう簡単にいかないけどねー」

……いやこう、色々あるにはあるんだ。だけどどれもみたことも聞いたこともないような物ばかりで、専門知識がないとちよつと無理。うん。

それでも半日くらいは飽きずに眺めていた。いちいち検分して、これはなんだろうあれはなんだろうと考えるだけで結構な時間はつ

ぶせるのである。特に今回、こいつの連れてきた数はかなりのものだったのだ。

「半日もホームから離れていると思ったら、何をしとるんだか」

振り返る。黒猫がいた。

「寝てるんじゃないの？」

「寝てばかりいては体が錆びるわ」

「よしよし、たまには錆を落としてしんぜよう」

「さわるでないわ」

前足で叩かれた。

「……しかし、こいつの姿も久しぶりだねー」

「三年くらいだっけ」

「うむ。十年くらいかかるかと思って、気合いを入れて整備してもらったんだがなあ」

少し寂しそうに、猫は船を眺めた。

今の時代。いずれゴミとなる物を求める者はどこにもいない。

今回の旅は長かった。いったい、どこまで探しに行ってたんだか。

……どこまで探しに行つて。

この旅を。

終えようと、思ったのか。

役目を終えて、船はもう答えない。

日が暮れるまで、僕達はその姿を眺めていた。

関係の根幹

ロボット三原則という物があつたとか。時の偉大なる科学者が定めたロボットに対して求められる三つの条件である。ちなみに猫は「科学者じゃなくて物書きだ」と言っていた。さすがに現実では三原則よりも細緻な法が施された。

その中の一つに「ロボットはロボットを作り出してはならない」というのがある。このロボットとは仮想人格を搭載したもののことだ。

なぜロボットがロボットを作つてはいけないか。人がロボットを完璧に管理するためだ。人が認識していないロボットが現れないようにするために、かのごとき制約が生み出されたのである。ある種の反乱抑止機能だったらしい。

まあ。

今じゃもう、守ってるやつなんていないけど。

「よーよー。あ、逃げるな」

景気の良さそうな声をあげて近づいてくる、人型ロボット。人間だったら二十歳くらいの女性型。笑顔といい、光を浴びた長い黒髪といい、輝いているところばかりの女だ。

「ははは。こいつめー。全然顔見せねーで会うなり逃げるとか。自壊でもする気か」

「今まさに壊されそうだよ」

ヘッドロックをかけられながら僕はぼやいた。

「大丈夫。壊しても直したげるから」

「完璧な循環だけど何もかもが間違ってるよ」

飽きたか、彼女はぽいと僕の頭を放した。首をねじって、ホームを見回す。

彼女は小首を傾げた。

「猫は？」

「最近不調でねえ」

「見たげよっか」

「あいつがいいって言ったらね。ま、パーツがあるかちよつとわからないんだけど」

「ふーん。でもこの間船が帰ってきてたでしょう？ 探したんじゃない？」

……なんで先読みされるかなあ。

頬を掻きながら僕は答えた。

「微妙」

「そっかあ……。困ったね」

彼女はそう言って、身じろぎ一つしない船を一瞥。

まともな部品工場なんてもう無いのに、などとぼやいている。

「さて。猫の話に流されかけたけど、あんたのメンテナンス期間もとーっくに過ぎてるんだからね」

ずびしと指を突きつけてくる彼女は、僕のメンテナンスである。かつて僕たちにかけられた制約はプログラム上に確かに残っている。

けれど、だからといって、抜け道が無いわけじゃない。

たとえば既存物の修理扱いにするとか、電源を落とした上でただの物を改造しているだけということにするとか。

結局のところ。法^{ルール}というのはあくまで法^{ルール}。

僕たちは人と共に在りたかったから人の法を守っていただけで、その法が完璧だったわけじゃない。

そこを勘違いしなければ……僕たちも、つれていってもらえたのかなあ、彼方への旅立ちに。

なとと考えながらも、口では別のことを話していたり。

「僕は止まったらそれまででいいんだけど」

「それじゃあわたしが嫌なのよ。だいたい後味悪いじゃない」

「じゃあしょうがないかあ」

「……納得いかねー。なんでわたしが仕方ない子扱いされるんだ？」

ふと、夜のホームに立っていた恋を探す少女を思いだす。

……様々なルールを作り、多くの事柄を自動化し、自らの手から僕たちへと任せてきた。そしてそんな僕たち自身が、^{プログラム}無数のルールで成立している。

それでも。僕たちがやっていける根幹は、好意頼みなんだよね、と。

彼女に手を引かれながら、その事を考えた。

道具の道具

ロータリーではキャンピングカーが待っていた。声をかけても返事は無い。巨大で複雑な機械ほど仮想人格の制御が必須になっていた人類末期だが、こいつはそれを積んでいない。しかしてその理由は、

「いや、わたしプログラミングできないし」

という残念な設計者^{持ち主}にある。

テーブルで僕の腕を解体していた彼女は頬杖をついた。じろりと、怪しむように僕を見る。

「突然何？」

「何が」

「あんたが他の奴に興味持たなんてさー」

「言われてみれば。……その点僕達って正反対だね」

彼女は島で数少ない整備士だ。島の住民すべて機械である事を考えれば、その彼女が関わる数は途方もない。一方で僕は、電車も滅多に来やしない廃墟寸前の駅で暇をしているだけ。逆というのなら、これ以上の逆も無い。

「なんで整備士始めたの？」

「んー、境遇？ わたしのモデル人格がそうだったらいいし、家には結構な整備道具があったし、整備についてはよく知らなかったし」

「最後のはどういう因果？」

「素質があるのにできないって悔しくない？」

僕は首を傾げた。

「できたところでどうするの、それ」

「ばっかねえ。できることに意味なんか無いのよ。やりたいことやつてるっていう充実に価値があるんじゃない」

がしゃん、と背もたれが悲鳴をあげる。彼女は憂鬱そうに息をついた。

「……だから、人がいなくなった途端、みーんな何していいかわかんなくなっちゃったんだろうなあ」

彼女は透徹した目で僕を見た。

「あんたもそうだったんじゃないの？」

……しかし、申し訳ないがそれは誤解だ。

「僕はその後の生まれだし」

「えっ。そうだったの？ うわー。じゃあ同世代？」

「君よりは年上だよ」

「あんたみたいなのがきちゃったからわたしはこうなのねえ」

「いやー。なんだろう。馬鹿にしてる？」

「おお。賢くなったのお、旧世代の分際で」

口にする端から言ってる事が変わってるよ……。

そう指摘すると、彼女は馬鹿にするように鼻を鳴らした。

「だーから、それでいいの。過去も未来もここにやないのよ。わたしは今やりたい事だったりできることだったりをするだけよ。いつまでもね」

本当、刹那的なやつだな。同種のシステムつんどとは思えないぞ。

まあでも、口にする感想はもう少しまろやかにすることにした。

「……整備なんて、いろんな奴とかかわるだろうに。もっといろいろ考えがあるのかと思った」

するとそのときだけ、彼女はちよつと遠い目をした。

「整備士に何言ってるの。わたしが道具である事を疑ったら、なんにもできやしないでしょう？」

黒猫の傷

「ごめん、ばっちゃん。わたしにや無理。パーツ足りないもん」

テーブルでだれていた黒猫に、彼女は言った。

黒猫はのんきにあくびをして「我が輩も年だしねえ」などと言っている。

「どれくらい保ちそう？」僕は聞いた。

「わっかんね。蓄電の代用ができればねえ。んー」

「いや、それ質問に答えてないけど」

「どうしたらいいのかなあ」

「あー……」

彼女は口をへの時に曲げている。諦めるつもりはないらしい。

まあ……ここが、僕と徹底的に違うところだよな。

僕は黒猫を見た。黒猫もこちらを見る。

「無理なら無理でいいんだよ」黒猫は言った。

「うっせー。無理ってのは未来なのよっ。未来なんかわたしが知るかっ」

……不思議だなあ。一つ一つの要素は全部正しいはずなのに、なんでつなぎあわせるとこうも理不尽に聞こえるのか。

「あっ。そうだ！　じっちゃんなら何とかできるかも」

「なんとかかなりそうなの？」

「わかんねー」

けど、その割に、答える声は明るかった。

ということ、じつちゃんに会いに行く事になった。じつちゃんが何者なのか、なにをどうするから何とかなるのか、まったく想像がつかないが、気づけば発車していたのだからしょうがない。

鼻歌こぼしてハンドル握る彼女、は放置して、僕と黒猫はキャンピングカーの整備室部分の床にべったんと座ってる。整備道具がぎゅちり詰まっているせいでスペースは狭い。車が上下する度、どこかがパレード状態になった。

「お前にしては強硬な手をとったね」

猫が言った。何のこと、ととぼけてみる。

「ふん。シグレを呼んだのお前だろう？ だいたい、半日もかけてパーツ探してるところをみてりゃ想像がつくわい」

それは単に、最近ずーっと寝てばかりで相手してくれないつれない相棒の代わりの暇を探してただけです。わざとらしすぎたので言うのはやめた。

「僕も最近調子悪かったからね」

「お前は滅びるに任せるタイプだろう。わたしとおんなじにね」

「そうねえ」

「我が輩に生きてほしいのかい？」

僕は答えず、質問で返す。

「饒舌だね。何を話したいの？」

黒猫はしっぽをふらりと揺らした。

「シグレは苦手なんだよ。まるで人間みたいだ」

「人間ってあんなだったの？」

……うーん。機械達はなんであんなややこしいのが好きだったんだけう。正気を失ってたとか？

黒猫は笑った。

「恋は盲目って言葉がある。まさにそれだったんだろうさ」

夜の駅ですれ違ったあのロボットを思い出した。

彼女は確かに、盲目と言えるほど視野が狭かった。

「でも、人間みたいなら、好きなんじゃないの？ 好きだったんでしょう？」

「好きだったさ。けど、向こうにとってはそれほどでも無かったんだよ」

「……ああ」

人類に取り残された事。

それは黒猫にとっては未だ癒えていない、盛大な傷跡失恋なのか。

……こっそりと、心の中だけで笑みをこぼす。

だからこそ、まだまだ黒猫に生きて欲しいんだよ。

理由探求

車に揺られて一時間。海から離れ、島の内側へ入ってく。このあたりは廃墟風景もひと段落。小鳥のさえずりが耳を潤す緑の光景に満ちている。

聞きかじりの思い出がある。

ここはかつて最後の人類が暮らした場所。

会った事はないけれど、僕を作ったのも彼女だそうだ。

今はこの森のどこかで眠っている。

享年三百十四歳。立派なサイボーグだった。

そんな彼女は、僕以外にもたくさんの機械を生み出した。

これから訪ねる「じっちゃん」もその一つである。

「帰れ」

ログハウスから出てきたやつは化石寸前の顔をしていた。

「帰らないからどうにしてよ」

嵐のような押し問答はシグレに一任して、僕は木陰で一休み。膝を伸ばして座り込み、ぽけっとする。すると黒猫が膝の上に来て、あくびをしながら丸くなった。

「眠いの？」

「ここは光が届かないからねえ」

「ああ。発電」

しかし僕達が発生させている電磁波で多少は発電できるはず。死ぬ事はあるまい。

「そういえば、じっちゃんって誰か知ってる？」

「知ってるよ」黒猫はこちらを見る。「初めて？」

「うん。会った事もない。怖そうな感じだね」

「大した奴じゃない。……ああ。お前にどこか似てるかもねえ」

「どんなところが？」

「引きこもってるくせに、誰かが訪ねてくるのを待ってるところ」

「ははあ。面倒くさそうな奴だね」

あれ。黒猫がなんか小さくなった。

ざくざくと草を踏みつけながら、じっちゃんがやってきた。小太りの小男をそのまま拡大したみたいなお姿だった。

「お前は誰だ」

じっちゃんは聞いた。僕は肩をすくめた。

「こいつの飼い主」

「なんの酔狂だ。こいつは人以外になついたりするやつじゃねえ」

「あ。人にはなついてたんだ。やっぱり好きだったんだねえ」

背中をなでると、尻尾で叩かれた。じっちゃんはそれを不思議そうに見ている。

「お前もそいつを直したいのか？」

「あはは。そうね」

「嘘だな」

「うん。嘘」

言葉を交わせばすぐにわかる。こいつは僕と同類。だから、自分の気持ちなんてわかつちやいない。

「正直、俺は嫌だ」

じっちゃんは腰を下ろしながら言った。

「生きたくもない奴を生かすのはおもしろくない」

「だろうね」

「お前は何でそいつと関わってるんだ？」

「まだ生きてるからでしょう」

今まで生きてきた。そして今も生きている。それだけが僕がこの黒猫について知っていること。

愛着はある。いなくなったらきつと寂しいだろう。もう二度と動かない錆付いた船を6思い出す。その絵は、ホームで丸くなったままぴくりともしない黒猫に変わる。僕はずっとそれを見下ろすのか。想像すると胸が痛んだ。

けれどそれだけ。

だからなんなのと思ってしまえば、僕の気持ちはあつと言う間に見えなくなる。空気みたいなものだ。

それに比べれば、じっちゃんはちよつと不純かな。

「嫌だっけ言うけど、なんで嫌になったの？」

じっちゃんは顔をしかめた。

僕は笑った。

「こうあつてほしいという思いがあつた。……もしくは、今でもそれがあつた。そうでなきゃ、嫌だなんて言えないよ」

そしてこの黒猫も。

……捨てられて、こんなところに流れ着いても死ぬことを選ばない。

漫然と時間が過ぎるに任せて、判断を先へ先へと後延ばしにしているだけ。

でもそれは、迷う夢があるということ。

駅のホームから送り出した、一体の機械を思いだす。

恋を探し続ける彼女。

人を知り。人に捨てられ。盛大な失恋に派手に傷ついて、今でもずるずる引きずって、こんなところに集まったまま未だにさまよい続けている。

この島に集まった者はみんなそう。

人間を知らない、僕以外。

だから。

僕もそれを、知りたいと思つたのだ。

「どうしても嫌ならそれでもいいよ。でもその代わり、嫌な理由を教えてくださいまで僕はしつこくつきまとう」

どっちにする？

じっちゃんはため息をついて、黒猫を抱えていった。

……こういうのも、北風と太陽っていうのかな？

猫はそうしてやってきた(偽)

「いつから一緒にいるの？」

木陰でぼんやりを続行していると、日差しの代わりに影と声が落ちてきた。仁王立ちの彼女だった。

「そろそろ十八年？」

「……ごめん。聞き方間違えた。二人のなれそめは？」

「船が連れてきたんだよ」

あのころは年に一度は戻ってきた。

黒猫を見つけた時は「これだけ盛大に塩水かぶっちゃ復活の見込み無いよねえ」と言ったものだ。

が、船にぶおーと怒られたので、ものは試しに洗濯ばさみで吊してみた。

ふぎゃーと復活した黒猫には盛大に引っかかれた。

「以来、同じ場所に居座ってる感じ」

「あんたの事だからろくに話しかけたりもしなかったんでしょねえ」

「お互い非干渉だったねえ。引っかかれたりはたかれたりする以外」
「……案外手を出してたんだ」

そうかもしれない。

なんかむずがゆくて頬を掻いた。

「向こうも時々話しかけてきたりしたし。お互いそれなりに暇つぶしの相手にはなったんじゃないかなあ」

「あんたにとって、あいつってどういうやつ？」

「口が悪いよね」

「それから？」

「なつかない」

「それから？」

「時々怖いことを言う」

「……わたし、あんたらがなんで相棒やってられるのかよくわからないわ」

彼女は頭を抱えた。

「相棒ねえ」

「違うの？ それだけ一緒にいながら？」

じろりと向けられた目。何か、粘っこいものの混じった光が混じっている気がする。

「違うと思うよ。お互いに都合よくはあったけど、お互い必要ってわけじゃなかったし」

僕も黒猫も、一人でいようとすればいられるだろう。それでもいやと、何事も諦められるから。

……違うか。

僕もあいつも、自分の思ってる一つの事以外は切り捨てられるっただけなのだ。

切り捨てられないものはなんだろう。

考えてみる。すぐに見つかった。それは習慣の中にある。

たとえばつれない態度。誰かにしかないと決めているような頑なさ。

何度も海辺を散歩する黒猫。何かを探しているように。

……あいつにとって、自分を運んできた船がそこで朽ち果てようとする景色はどんな風に写ったんだろう。

もうあいつが、何かを新たに運んでくる事はない。その事実をどう捉えたのか。

一つの夢が終焉を迎えた。

それは毒のように、病氣のように、この島に広まっていく気がする。

「あいつは何を求めてたんだろうなあ」

だから気になる。

どうせいつかは終わる関係。いつかは果てる体。そこに何を宿していたのかを。

「あんた、そんなに積極的だったっけ？」

彼女は眉を持ち上げる。

僕はスルー。理由はわかりきっていたからだ。

夜になって、じっちゃんと言った。

「駄目だ。直せない」

猫はそうしてやってきた（真）

骨のきしみが聞こえ始めたのはいつからか。

つい最近の事ではなかった。海に漂い、記憶が漂白される遙か前から、その音はずっと隣にあった。

けれど無視していた。直せないのはわかっていた。

世にあるものはすべて滅びる。

それが自滅の言い訳にならないのは知っている。滅びるからと言って滅びてもいいやと何もかもを諦めていたら、生あるものに許され、選択肢は生まれた瞬間から自殺だけだ。

わたしはそれでもよかったけど……。

「調子が悪かったらすぐに言ってね」

ずっと昔。余命一月と言われた子にそう言われてしまった時から。

『わたし』は『我が輩』をすることにした。

骨のきしみが聞こえ始めたのはいつからか。

つい最近の事ではなかった。海に漂い、記憶が漂白される遙か前から、その音はずっと隣にあった。

けれど無視していた。直せないのはわかっていた。わかっていたから、隠し続けた。

無理、とじっちゃん——もとい、ユアンは言った。

ユアンはオリジナルのパーツを作る偏屈だ。いや、偏屈というの

は穏やかに過ぎよう。

そう。ユアンは死体を次ぎあわせて異形を作り出す狂人である。

現代では、CBはCBを作ってはならない、などという人間の決めたルールを遵守する者はほとんどいない。けれどやはりそんなことはしないとする者がほとんどだ。

仮想人格。複雑なシステムを制御するための、人格をモデルにしたシステムである。CBとは仮想人格を積んだ機械を指す。

人間をモデルにしているだけあって、CBは少し変わった癖を持つ。たとえば、自分の体に手をいれる事に嫌悪を感じるという具合に。

ユアンはその制約を突破した希有な例だ。本来別の型に入るべき仮想人格が人型のハードに入ったからのバグだという。

故に彼の手は、普通のCBより遙かに緩やかな制約しかなく。

その手ですら、我が輩の部品が作れなかったのだ。

「そうかい」

ユアンに無理と言われたとき、我が輩はそう返した。それ以上の言葉は持たなかったし、まあ、こんなものかな、という気もしたからだ。

我が輩をこの島につれてきたあの船が、声一つ上げずに海辺に横たわったあの時に思ったのだ。

『ああ、その時が来たんだ――』

しばらく物思いに耽っていると、ユアンは我が輩を抱きかかえて

外に出た。シグレと、そういえばまだ名前も聞いたことのない男のCBが、ユアンの説明を聞いている。

シグレは見る見る険しい顔つきになっていく。彼女には諦めの二文字は無いのだろう。それはそれで希有な在りようだ。まるで人間のよう。

それが懐かしく、疎ましい。

思い出が楽しければ楽しいほど、それに手が届かなというのは深く胸をえぐってくる。

ユアンとシグレが相談に……というより、シグレがユアンにかみついているのを後目に、我が輩は彼の膝の上に丸くなった。彼の体は暖かい。電気を無駄にくだいそう。

「ということらしいよ」

「そうだね」

返事はいつも通り淡泊だ。撫でてこようとしたので、尻尾で叩き落とす。

「お前はどうするんだい？」

「君はどうしたいの？」

残るのは沈黙だけ。

いや、ユアンとシグレの言い争う声。

「まあ、こんなもんだね。元々長生きしすぎたんだ」

「かもね。どうだった？」

「微妙だね。あんたも退屈な奴だったし」

「散々叩いておいてそれかあ……難しいね、猫って」

「自分でないもんは、すべからず難しいもんさ」

ふうんと、気のない返事。わりかしいいこと言ったと思ったんだけど。

これだからつまらないというのだ。

「まあ。どうしようもないね」

「そっかぁ……」

我が輩は顔を上げた。

なんとなく、声の様子が、いつもと違う気がした。

「どうしようもない、のかなあ？」

解体心因

「どうしようもない、のかなあ？」

……言った後に訪れたのは驚き。それから呆然。それを言ったのが自分なんて、しばらく信じられなかった。

「どうしたんだい」

猫が見る。バグったプログラムでも見るようなまなざし。

「本当に無理なのかなあって思っただけ」

「手は無いだろう」

「うーん」

頭の中で記憶がぼんやりと渦を巻く。

イメージは綿菓子。棒を差し込んで、絡みつくものを形にする感じ。

けれどぐにゃぐにゃの意識では、まともな言葉^形は得られない。だからぐにゃぐにゃのまま解きほぐす。

「正直な話、死にたいなら僕は止められないんだけど」

「そうかい」

「生きたくないの？」

「それは同じなのかねえ」

黒猫は尻尾をふった。

「生きたいと、死にたくない。死にたいと、生きたくない。我が輩

にはどこか違う気がするね」

「そりゃまあ」

そんなのは明確だ。

生きたと死にたいは願望で、

死にたくないと生きたくないは逃避だ。

何かを目指しているのは変わらないけど、向いている方向が逆なのだから。そりゃ違うようにも思えるだろう。

「黒猫は生きたくないんだっけ」

「……」

沈黙で迎え打たれた。踏み込むなという無言の要求。
なので、踏み込んでみた。

「そんなに人間が恋しい？」

瞬間。空気が音を立てて凍った。

「僕たちは人間がいなくても存在していられる。人間に求められて生まれたけれど、それだけしかできないわけじゃない」

生まれる動機と、生きる動機は違うものだ。

前者は自分の内に無く、後者は自分の内にしか無い。

そして僕達は、自分の内がわからない。

「君達って人間が好きだよな。僕にはよくわからないし、たぶん、もう人間に会う事がない僕にはどうあっても共有できない気持ちなんだろうけど」
ロジック

「何時までも引きずるなとかいうつもりかい？」

素早く、かみつくように黒猫は言う。
僕は肩をすくめて返した。

「いや。それを言い訳にして自分のことを考えないのは、愛してくれた人への侮辱だよねって思っただけ」

——お前に何がわかる。
そんな予期した反論は、誰も口にしなかった。
ただ黒猫は。

「じゃあ、お前は どうしろっていうんだい」

困り果てたようにそう言った。

彼らは派手に失恋して、派手に傷ついた廃棄品。

今でもそれを忘れられない、恋に囚われた眠り姫。

その夢は甘美で、だからこそ、いつまで経っても出てこれられなくて。

——人を知らない僕だけが、その夢を共有できない。

だから。

だ、か、ら。

そんな事は知るもんか。そんな過去なんて気にするか。
よそ見をしてたら蹴っ飛ばされても文句は言えないのだ。

だから。彼らが何時までも微睡み続けるというのなら、

「僕と楽しく生きようよ」

僕はその夢^恋を引き裂こう。

しばらく猫は黙っていた。

けれど答えは、そんなに待つこともなかった。

「楽しくって。我が輩はもう終わりだよ」

ひねくれた失笑がそれだった。

僕は言った。

「そんなのどうにかする」

「どうにかできるのかい」

「そっちにどうにかする気があるならね」

「ほー。大きく出たね、こわっぱのくせに」

からかいの色は消えない。僕は黒猫をじろりと見た。

「生きたい？ 死にたい？ どっち」

逃げさせやしない。そういう意思を込めた一言に、黒猫は戸惑うように尻尾を揺らす。けれど体を押さえたら、やれやれと息をついた。

「……生きたい、と言ったらどうするんだい？」

黒猫こちらを見上げる。

「お前は整備士じゃない。そんな知識もない。まあ、お前の作り手の墓でも暴けば何かはわかるかもしれないけど、ユアンでも駄目な

らどうせ足りないパーツなんて作れっこない。それでもあんたには何とかできるのかい？」

彼女の言うとおり。そしてそんなことは百も承知だ。けれど。治さなくてもいいのなら、なんとかする方法は一つある。

ということ、猫を横におろして立ち上がった。

言い争いに負けて打ちひしがれているシグレに言う。

「お願いがあるんだけど」

「……何？」

眉をひそめるシグレに、僕は笑顔のまま答を告げた。

「かわいい黒猫を一匹、新しく作ってくれない？」

猫の見た夢

良くも悪くも。意志というものは現実と関係なしに行動を選び取る。恋人を捜す彼女しかり、諦めを知らないシグレしかり。

そのくせ僕たちは無限の時間があって、それをいくらでもつぎ込める。

だから。

諦めない限り、できる事がほとんどだ。

「でーきーたっ！」

故に、パーツを集めて新しいハードを作るくらい、造作も無い事なのだ。

我が輩はプレゼントとして作られた。

柔らかくもふもふで抱き心地のいい体。

清潔さが売りで、汚れなんてつくこともない除菌機能のナノマシン付き。

たとえ管理区域の病院でも問題なく過ごせるオーダーメイド。

黒猫の形はその部屋の主の希望であり、ひねくれた話し方も好みの童話を模したものであった。

そうして作られた時から思っていた。

我が輩はその子と共に生きて、

その子が死ぬ時に、存在意義を失うのだろう、と。

そうしてやってきた病院で、我が輩は半年を過ごした。

子供に与えられたのは百平方メートル。高価な無菌室は、3D映像で密林でも火星の地表でも無限の可能性を再現できた。

我が輩達は旅をした。場所は決まって森の中。奥に行けば行くほどに深く生い茂る暗い森。不気味な鳥の鳴き声に、タキシードを着たうさぎの案内。

不思議な歌を歌う兵隊達をこっそり追いかけて、城や薔薇庭園に紛れたりした。

子供の声はどこまでも楽しそう。息を潜めてさえ、瞳の輝きは隠せなかった。

そしてある時、我が輩は聞いた。

「楽しいかい？」

子供は答えた。

「うん。楽しかった」

そして翌日、子供は息を引き取った。

……後悔があるとすれば、あの質問だけ。

もしもやり直せるのなら。

今度はあんな事を聞いたりせず、夢のように楽しいままあの子を見送ってやりたいと思った。

それが我が輩の後悔だった。

「悪魔みたいなやつだ」

目を覚まして早々にユアンの感想を聞く事になった。

ハードの全交換。これは人間に当てはめて言うなら、クローンへの脳移植みたいなものだ。いや、どちらかというとフランケンシュタインだろうか。何しろこの体は様々なパーツの寄せ集めなのだから。

「まあ。今の我が輩にはふさわしかろう」

「あいつは一体何なんだ？」ユアンは聞いた。「俺達らしく無い」

「我が輩もそれを知りたいね」

「……その我が輩ってのは何なんだ？」

「猫はそう言わなければならない、なんて言われたことがあってね」

童話のネタには無かったが、あの頃は疑問を持たなかった。主が喜べばそれで良かったから。

「しかし。よく生きる気になったな」

「別にその気なんてなかったさ。ただ……」

『僕と楽しく生きようよ』

「昔を思い出してね」

我が輩は黙って机から飛び降りた。前よりバネのある体だ。五メートルくらいの段差なら軽く飛び越えられるだろう。夜目もきくし、鼻もきく。……ずいぶんオーバースペックである。

が、まあ、あいつを楽しませるのは骨だろうし、丁度いい。

「ユアン。ありがとよ」

ユアンは背中を向けたままけつと吐き捨てた。

ということだ。

ユアンからは悪魔呼ばわりされ、シグレからはもっと早く言えと叱られたものの、黒猫は無事復活した。体も快調なようで、撫でようとしたら手も届かないくらい高い枝に飛び乗って逃げられた。復活しすぎである。

まあ元気になって良かった。

「……良かったのかなあ」

車の助手席で、ふとつぶやいた。ライトのつかない車で夜の道を行くシグレは、あん？ と脅すようにこちらを睨んだ。

「いやさ。勝手な事したかなあって」

「勝手だったともさ。それが何よ」

相談する相手を間違えた。僕は沈黙する。

けど、冷静になればずいぶん勝手な事をしたと思う。

生きたいという一言だって、無理矢理言わせたようなものだ。僕のどこにも、無理強いをする権利なんてないっていうのに。

そう。無理強いをする権利なんてどこにもありやしない。

僕はただ、嫉妬に駆られて暴走しただけだ。

それが正しいなんて風には思えないし、思うつもりもない。

だけど。

「あのさー」

「なによ」

「失恋してうじうじしてるやつって、ムカつくね」
「ぶっ」

車が揺れた。

「……突然何言い出すのよ、あんた」

「いやなんかさあ。こっちを見ろ、というかさ」

考えるに。

あのまま、一度もこっちをまともに見ないで死なれるのは、やっぱりおもしろくなかった気がする。

だからまあ。その点は、良かったのかなあ……なんて、思う自分もいて。

「むじゅかしいね」

頬をつねられながら、僕はつぶやいた。

エピソード1 乖離の果て

白亜の髪。青い瞳。

月を射るように見上げている、一人の少女。

前に聞いたよりも上手になった、子供っぽい歌を響かせて。
彼女は再び、現れた。

「まだ居たんですね」

「そっちこそ、まだ探してるんですか」

ええまあ、と彼女は頷いた。

今度は休憩室まで案内しない。電車の過ぎ去ったホームで二人で
たたずんでいる。

「……ちょっと景色が変わりましたね」

そうして目を向ければ夜の海には一つの巨影が屹立している。文
字通りの、墓標だった。

「まるで墓標ね」

「まあ。果ての島だしね」

そんなことより、と僕は聞いた。

「見つかりそうですか？」

「どうでしょう。でもよく見れば、そこかしこにあるような気もす

るのです」

彼女はこちらを向いた。

光を閉じこめたように堅い瞳。

「わたし達はみんな望まれて生まれたはずなんです。誰一人して、望まなければ生まれなかったはずなのです。だからそこには、何かがあったと思うのです」

……ふと思う。

僕を作って、僕とは決して顔をあわせなかった、この島にいた最後の人間。

その人は何故僕を作ったのか。

その疑問が、口を開かせた。

「本当に望まれて生まれたのかな、僕たち」

「論理的には」

「そっか。……でも、結局それって、何の意味があるの？」

「そこには愛や恋がある気がするのです」

とっさには、何も言えなかった。

けれど、黒猫の事を思い出して、思わず聞いていた。

「もう届かない愛に意味はあるの？」

「わかりません。……けれど考えてみれば、この島に流れ着いた誰もが、すべて、存在する意義があったはず。だったらそこには意味があると思います」

「過去に求められていた事があったとしても、生まれた理由が愛だったとしても、今僕たちは誰にも求められていないし、誰の愛もうけていない。だったら、そんな事に意味はあるの？」

自分でも僻んだ問いだと思った。
けれど彼女は迷い無く答えた。

「あります。少なくともわたし達は、好きだった人達を否定はしたくないですから」

それは。僕には決して共感出来ない答えだった。
でも、僕の心境に気付かずに彼女は続けた。

「その上で意味が欲しいなら、今の誰かに求めるのが筋でしょう。
……もしかしたらそれが恋という関係なのかもしれませんが」

そう言うのと、彼女は駅から出て行った。あの歌を響かせながら。

一人取り残されて、僕はベンチに座り込む。溜息は案外重くて深かった。

足音もなく黒猫がすり寄ってきていた。軽くジャンプして肩に着地。重い。

「なにやら妙な顔をしているの」
「妙って……」

まあ。妙と言われれば妙か。愛だの恋だのという話は、僕にはあんまり似合わない。

「……黒猫はさ。人間が好き？」
「前の飼い主は嫌いじゃなかった」

「ふうん。……僕は？」

黒猫は笑った。意地悪そうに。

「言ってもいいのかい？」

「あー。うーん……」

悩んでいると、黒猫は髭をぴくぴくさせた。

「馬鹿者め。お前が愛だの恋だの語るのは百年早い」

「ですか」

「ああ。……だがその気がするなら、お前にもいずれわからうさ」

どこか投げやりな口調。

僕はちよつとがっかりして、息をついた。

「……ええい。確かめてみればいいではないか。お前も、自分の足で」

「自分の足で？」

「そう。どうせずっとこの駅にいたのだろう。なんならこの島をもう少し見てみるのも良からう。その方が楽しからうしな」

僕はしばらく黙った。まさか黒猫が、こんな風に自分から提案してくるなんて。

修理したときにバグったのかな？

けどまあ。そうだとしても、その提案はなかなか面白そうだった。

「それもいいかもね」

早速席を立つ。すたすたとホームの端に立ち、左右を確認。電車の迫る様子はなし。左右に延びた線路は緩やかなカーブを月明かりに輝かせている。

「どっちに行く？」

「ま、待て。もう行くのか？」

「うん。どっちにしようか。……んー、よし」

着地。左向け、左。

さ、行くか。

「せーんろはつづくーよ」

どこに続くのか。

どこまでも続くのか。

それは知らない。わからない。

けれどここはすでに果て。

人の居なくなった星の果てであり、人を失った機械達のなれの果て。

そう。ここは思いと思いの乖離の果て。

けれど彼らは手放せない。どうしても手放さない。後生大事にかつての夢を抱えていて、離れたことに傷ついたまま。

それは僕には決して共感出来ない思い。

だから疎外感を感じていたけど。

……いい機会だし。どうせなら。それがなんなのか確かめてみることにしよう。

エピソード1 乖離の果て（後書き）

黒猫編、もとい乖離編終了。

次からは解離編です。島を旅しながらもうちょっといろんな機会達の有り様を描いてみたいなあと思ってるけれど果たしてどうなるだろう。

灯台の下

青空の下、黒猫は歩きながら唐突に話し出した。

そういえば、この島には灯台があるらしい。夜になれば、地上より少し高い位置で黄色い光を海に向けるあれだ。

正直、何のために存在しているのかかなり怪しい。

そもそも現代の船は星空から位置情報算出くらい平気でやってのけるのであんまり意味ない。

「そういうの気になるだろう」

したり顔で言う黒猫は、尻尾振りながら一步先を行く。

とことところ。線路を器用に綱渡るのを見るに、今日は機嫌がいいみたい。

「そうだねえ」

相槌はあくまで適当。だって気になるかと言われても、ねえ。

誰にも使われない機械の残骸。役目を指示した者すらないのにそれを続けていたゴミ処理船。もはやここにはいない人間にいつまでも恋いこがれていた愛玩猫。

役目の意義を失って久しいものなんて、この島にはありふれてる。

ああ。だけど、それでも役目を全うし続ける物のなんて多いことだろう。

「そういや。あの灯台の下には仙人がいると聞いたことがあるね」
「ほほう。仙人とな」

仙人って山にいるイメージなんだけど。
追い出されたのかな。

「けど、仙人って。誰が言い出したのさ、それ」

「知らないよんなこと」黒猫は言った。「名前なんて呼びたい奴が
勝手に決めるもんさ」

「ふうん」

それは逆説、仙人だって思った者がいたということだ。

だから名前には意味がある。他人が、本人をどう見ているかとい
う証だから。

それが仙人ときた。興味深いにもほどがある。

「会いに行ってみようか」

「いきやいいさ」

え？ あれ？

「こないの？」

「誰がんなこと言ったよ」

「——そういえばそっか」

早とちり早とちり。口ずさみながら、針路修正。

目的地は五キロ先。青空の下、鳥の糞に彩られた灯台である。

旧式仙人

海鳥の声に満ちていた。

空は灰色。巨人が引きちぎってできたような隙間だけが青い。この短時間で突然現れた雲は、走り疲れたか立ち止まったまま動く気配がかけらもない。

「最近は天気がどんどん悪くなってくね」黒猫が言う。

「ずっとこんなものじゃない？」

「何十年も前はこんな変な天気はなかったよ」

「ふうん」

変と言われても、僕が目にしたことのある天気はいつだってこんなものだ。今夜は嵐だろう。どれだけ続くかはわからない。むしろここしばらくの晴天の方が珍しかった。

「こうなると灯台でしばらく泊まりかな」

「仙人が許してくれりゃあね」

「許してくれないと困るねえ」

荒事は苦手なのだ。できれば、快く泊めてほしい。

スクラップの山を音を立てて上っていく。角張った凹凸が無数に生え斜面。とっかかりは多いが、歩きにくいことこの上ない。何度もよろけ、前後にふらふら揺れながら、頼りなく斜面を登っていく。すいすいと脇を抜けていく黒猫。思わず立ち止まって見つめると、黒猫は振り返った。

ふふんと髭を揺らし、一足飛びに山を越えていく。このやろ。

そうしてスクラップの山を越えた先に、その港は広がっていた。

／＊／

港は存外きれいだった。未だ清掃機能が働いているのだろう、船着き場と灯台をつなぐ三日月型の道には残骸の破片一つない。海にもゴミはないようで、上空には海鳥が舞い、魚を捕らえようと急降下を繰り返している。

とはいえ、その清掃方針にはもの申したい。「臭い物には蓋をしろ」もしくは「とりあえず押入につっこんどけ」方式によって築かれたスクラップの山々は、入っていくにも一苦労だ。

「わたしやあそれほどじゃなかったけどね」

「はいはい、偉い偉い」

例外はどうでもいいのである。

「ともかく、ここまできたら清掃担当に一言文句を付けないと」

「目的が変わってないかい？」

「仙人に清掃担当が誰か聞こう」

「無理矢理つなげたね」

「つぎはぎは僕らの得意分野」

結果として要件を満たしていればいいのである。細かいことは気にしてはいけない。案ずるより生むがやすし。……こういう使い方でよかっただっけ。

海沿いにしばらく歩いていると、人影が見えてきた。灯台のほど近くの地面に腰掛け、長い釣り竿を海に向けている。その長さ、お

よそ十メートルはあろうか。振るうのも大変そうな釣り竿は、風の中でも微動だにしない。

釣り竿を握っているのは男性型のドールだった。潮風に吹かれて、かみがぺったりと頭に張り付いてる。日焼けはしてないけど、錆びそうだ。

傍らで歩みを止めた。猫は服をひっかいて肩に上ってくる。

これが噂の仙人か。

「釣れますか？」

仙人は顔を上げると、にこっと笑った。

「竜が釣れました」

仙人の語る竜

灯台守だ、と仙人は名乗った。

「仙人じゃないの？」

仙人はどこか遠くを見るように目を細めた。

「そう呼ばれたこともありすねえ」

「ですか。ところで仙人って何ですか？」

「その昔、山に隠れ住んでいた人間の一種族だそうです。一説によれば不老不死だったとも、雲霞を食べて生きていたとも伝わる不思議な種族だったようで」

「燃費のいいハードだったんですね。味気なさそうだけど」

「ははは」

笑われることなのだろうか。まあ、楽しいことに悪いことはないかな。多分。

僕は隣に腰を下ろした。黒猫は少し離れたところで丸くなる。

「あなた方は何をなさっていたのですか？」

「海の底に沈んだ伝説の秘宝を求めて」

あ、口が出任せを。仙人もきょとしてるし。

「というのは冗談で。目的はあんまりないんですよ。ただ旅をして、いろいろ見てみようかと思って」

「見識を広げる旅ですか」

そう言われると真面目なものに思えるから不思議だ。実体は何も変わっていないのに。この世は気のせいでできているんだなあ。

いいことだ。それなら誰だっていい気になれそうだし。この世も悲嘆したものじゃない。

「仙人さんは何をしてるんですか」

「だから、灯台守ですよ。あの灯台で、船が来るのを待ってます」

仙人が指さしたのは、首を曲げなくてはってっぺんが見えないくらい高い白い灯台だった。歩いて上らなくてはならないとしたら大変そう。壁を上ったら両手が鳥の糞まみれになるだろう。

「船かあ。少し前にきましたね」

「長いつきあいでした」

「あ。知り合い？」

「はい。最後の船出の時には、もう顔を合わせることはないと思いますが」

案の定でしたねと、仙人は笑った。

確かに、あの船がやってきたのはこの港ではなく、ゴミの押し寄せる廃浜だ。

「どうしてこなかったんでしょうね」

「ここに来たら、清掃システムに片づけられてしまいますから。竜がいらない今、それを選ぶのは自殺者だけでしよう」

「……さっきから気になってたんですけど。竜って何ですか？」

竜が釣れた、とも言っていたし。いったい何を指しているのやら。とはいえ。こっちとしては当然の問いは、仙人をきよんとさせただけだった。そんなに変なことを言っただろうか。

「ああ……いえ。竜というのは、なんと言いますか。一つの世界で

す」

「世界？」

「はい。すべてはそこから生まれ、そこで生き、帰る。独立した循環系のシステムです。人間たちが箱船として用いたCB種族でもあります」

「ふうん……」

聞いたこともなかった。

潮風に吹かれながら頬を搔く。竜。竜……。想像もつかないなあ。

「なんで僕が竜なんですか？」

「さて」仙人は首を傾げた。「そう見えただけです」

「竜はドールなの？」

「竜は竜です。もつとも、竜を名乗るCBはハードにこだわりの持たない物が多かったと聞きます。その仮想人格が特殊だったのでしょう」

CB、サイバーブラッドはソフトウェア仮想人格とハードウェア体から成立する。とはいえそれらは独立ではない。元々複雑系の処理のために生み出されたのが自己改良型ソフト、仮想人格だ。だからCBは自分の体にこだわりの持つ。

しかし竜は体にこだわりの持たないと言う。なんと奇妙な。

「それって、CBと言えるんですか？」

「どうでしょう。彼らの心のあり用はついぞわたしには理解できませんでしたから」

僕は口を斜めにした。すこし考える。含みのある言葉を追求すべ

きか、はぐらかされた方を追求すべきか。どっちの方が嫌がらせになるだろう。

「で、なんで僕が竜なんですか？」

嫌がらせよりも自分の好奇心を優先した。

「……わたしにはプログラムが見えるんですよ」仙人は答えた。「あなたの形は、竜のそれを思わせました」
「なるほど」

地面に横になる。溜息をこぼした。

わかってしまえばあつけない。

……竜、か。

どんな形かもわからないものに、今見ている物が似ていると言える。その心のありようはなかなか興味深かった。
なるほど、仙人なんて呼ばれるわけだ。

「あなたはここで何をやってるんですか？」
「釣りです」

声はわずかにこわばっていた。

風が吹く。

さきほどの印象なんて嘘だったように、彼の表情は変わらないままだった。

「が、そろそろやめましようか。嵐がきます」

灯台守の仕事

まもなくして、盛大な暴風雨が僕たちを襲った。風速三十メートル毎秒。数値は直感でありその正確さを保証するものではない。ただまあ、スクラップ山にあったバイクの吹っ飛び具合からして、そのくらいじゃなからうか。

灯台は全身を振るわせていた。削岩気じみた轟音が耐久力を削っていく。そのうち根本からばきつといきそう。

「だから壁を削らないの」
「にゃー」

かりかりやってる黒猫を抱えあげる。どうしたんだろうこいつは。仙人と顔を合わせてから本当に猫になってしまったみたいだ。……本物の猫とか、見たことないけど。

灯台の中は存外明るかった。自生した苔がぼんやりと光を放っているからだ。いったい何を栄養にしているのか皆目検討つかないし、赤い光は壁に張り付く血のように見えるけど、まあ、明るいことに文句はない。

内縁をぐるりと巡る階段を降りていく。一番下で仙人は生活している。ここから見ると、床に散らばったたくさんの部品がちかちかと光って見える。

仙人は食事の習慣は無いみたいで、キッチンとかはないけれど。電磁波の合成や光発電で完全にしのいでいるみたいだ。

「って、眠らないの。自分で歩かないと太るよ？」

腕の中で黒猫が尻尾を振る。ふらりふらりと頼りない。

結局階段の下まで運んでやった。適当なところにおろすと、丸くなったまま動かない。本格的に寝入ったらしい。……こいつ、野生に戻りすぎだ。

「お疲れのようですね」

ロッドを分解、清掃していた仙人が顔を上げる。僕はうなずきながら傍らに座り込んだ。

「それで、本当はこんなところで何やってるんです？」

「今時、何かをやっている物の方が少ないでしょう」

「あくまではぐらかす気ですか」

「いやまあ……。直球ですね」

「周りにひねくれ物が多かったので」

ついでに言えば、あなたはひねたふりをしているけれど、その実ごまかすのはあんまり上手じゃない。なまじ他者の人格なんかが見えてしまえば、ひねくれるのも難しいのだろう。

というわけで。せっかく自責の念を感じてくれるのだし、沈黙を貫くことにする。

かさかさと、ロッドを整理する隣でじーっと待つ。

ややあって、仙人は口を開いた。

「退屈なら、一つお話をしましょうか」

期待とは違ったけど、退屈なのはその通り。

「是非」

もちろん話題に乗るしかない。

仙人は笑った。語り始める。

「このあたりはスクラップで山になっているんですが、これは北にかなり広がっていることをご存じですか？」

「いえ、まったく」

「昔タンカーが停泊した頃、このあたりに暮らしていたCBが停泊地を作ったんですよ。けれどそのタンカーが死んだ頃から、使う物もいなくなりましてね。次第に、押し寄せてくるゴミが乗り上げてきたんです」

「それでああなったんですか？」

「それはきっかけでした。さすがに、このままというわけにも生きませんでしたから。わたしは元々整備士でしたし、清掃用のシステムを作ってみました。とはいえ、海から流れてきた物を積み上げていくだけのものではが」

「はあ。すぐく歩きにくかったですよ、あそこ」

「ははは」

笑ってすまされてしまった。タイミングが悪かったか。

「今の話で気づきませんか？」

「ん？ ……ああ、そうか」

魔物の正体にぴんときた。

「それ、実在するんですかね、まだ」

「さて。けれどわたしの清掃システムはまだ動いているはずですよ。港も一部はきれいなままですし」

「なるほど」

寝転がる。床に敷き詰められた部品に工具が背中を押し退けようと突き刺さる。それを無視して目をつむった。
さあつて。晴れたら冒険だ。

モンスターハンター1

「晴れないねえ」

「まあ、世の中都合よく行くことなんてそうはないもんだ」

懷に潜り込んだまま言う台詞じゃないよなあ。

黄色い雨合羽を着てスクラップの丘に行く。仙人の言った北側の土地は特に丁寧に粉砕されていて、どれも小石大の大きさしかない。水と混じりあい浮ついた積み重ねは踏めばぐしゃりと音がする。

天候、嵐。あいにくの暴風雨は絶好の散歩日よりとはいいたい。一方で道程は起伏豊かで絶好のハイキングコースを作り上げている。このスクラップの丘を作った者は、起伏をならすなんてことは夢にも思わなかったのだろう。そんなものはわたしの仕事ではない、とすら思っていた可能性もある。

遠くで、がらがらがつしゃんと音がした。盛大な倒壊音は、また一つスクラップの山が風の暴力に屈したことによるものだ。心の折れる劣ってこんな感じなのかなあ、なんて夢想。僕も帰ろうか。

「こんな天気じゃ魔物もでてこないかもね」

「魔物がそんな根性無しなわけないだろ。お前さんじゃあるまいに」

ふん、と鼻を鳴らす黒猫。

自分の足でたたないくせに妙に偉そうだな。

……ん？ それでいいのか。偉いなら。

くるんと思考がループして、攻めどころを見失った。まあ、そんなこともあるうさねと、山奥のおばあさんじみた感慨に耽る暇もな

くあぶない吹き飛ばされるところだった。突風にあおられて、スクラップの斜面に身を預けた。

これって、天地をどちらかを向いてないという違いはあれ、倒れてるのと何の代わりもないよなあ、実際。

「そういえばさ」

「なんだい」

「仙人といるときずっと黙ってたけどどうしたの？」

猫はにたあと笑った。懐から見上げてくるっていうアングルのせいか、そのままぱくんちよされそうだ。

「心配したのかい」

「そりゃまあ」

「そうかいそうかい。殊勝なことだね」

「はあ……」

「単に、あいつが気に食わなかっただけさ」

……たとえば、唐突に稲光が走ったような。そんな鋭さが、声に満ちた。

「気に食わないねえ……」

「ああ。こっちの中身を勝手に除こうなんざろくな生まれじゃないに決まってる。ありゃ元竜の目だね」

「竜の目？ ああ。そういうのもあるんだね」

「そうさ。竜は都市一つを内に抱えるCBだからね。そりゃ内部管理用の目もたくさんいるってもんさ」

でかくなると大変なんだな。

「……竜って見たこと無いよ」

「大抵の竜は海の底か空の果てさ。そもそも箱船作戦用のCBなんだ」

「ああ。じゃあ、どこかにいつちゃったのか」

箱船作戦。星が水没する危機にあった人類にCBが提案した地球からの離脱作戦。何かの神話をモチーフにした一大プロジェクトは、実に地球生命の八十パーセントをつれていった。

そのために作られたといわれたら、なるほど、納得できないこともない。とはいえ、神話がモチーフなのに箱船の名前が竜というのはなかなかでたらめな感じである。

「仙人って何ができるの？」

「さあね。けど、いろいろ見えるんだ、いろいろいくるのだからうまいだろうね」

「ふうん」

さて。スクラップの山に埋もれて休憩するのもいい加減飽きたし。もう一踏ん張り、魔物探しをがんばろう。

……と、思ったところに、そいつは現れた。

跳ね上がるスクラップと水滴。暴風に叩かれながらも己の歩調をゆるめることのない無骨な影。

がちがちがちと、不器用な音を立てて巨大な顎か上下した。

見た目としては、たぶん、狼。十メートルはあるし、背中に妙な突起が生えているけど、記憶に一番マッチする画像を参照するならそれは狼と呼ぶべき物だった。

暴風を掻き散らす咆哮。五十メートルもの距離を置いてなおその声は全身を打ちのめした。

なるほど。魔物と呼ばれるだけはある。

「どうすんだい、お前さん」

「うん。逃げよう」

考える余地などどこにあらう。僕は全力で走り出、し、

「え」

滑る足下。

足が滑ったのではなく、地面そのものがずるりとスライドした。

もとより粉々のスクラップの土壌である。ここ数日の風雨によって、地盤はとつくに液化化一歩手前だったことがこの事態を生み出した。

「おお」

「にゃ」

つまり。

辺り一帯が、地響きをたてながらずるずると音を立てて滑っていたのだったああああああ。

ノットスペランカー

「……無事ー？」

「ああ。あんたも大丈夫そうだね」

そうだね、と言いながら立ち上がる。手は無事。足も無事。頭もたぶんとれてない。けれど周囲は真っ暗闇。視覚調整。見えた。

「通路？」

「みたいだね。スクラップの山の下は何かの施設になっていた、と」

「いや、ないでしょ、それは」

偶然を僕は信じない。幸運がこの世に転がっているのなら、人間においてかれたCB達が何百年もへこんでたりはしなかっただろうから。

だからこれは意図的な罠。おそらくは、仙人の。

意図するところは……まあ、一つ二つは想像できるけど。

「ま、僕のせいだろうしなあ」

「何のこったい」

「……よーしよーし。たかーいたかーいったい」

可哀想な物扱いしたら引っかかれた。尻尾たててふしゃーの構え。よし、うまく誤魔化せた。黒猫は愉快犯なくせして心が弱いので扱いは慎重にというコメントが必要だ。

「ま、先に言ってみようか」

前か後ろか。選択肢は二つきり。踊らされるのは嫌いというやつも世の中にはいるようだけど、そんなのどっちでもいい僕は平気で道を選んでく。考えず、望まず、歩くだけというのは存外気楽だ。気楽なだけで、楽しくはないけど。

／＊／

ほどなくしてコントロールルームっぽいところにたどり着いた。途中、崩壊した通路に行き先を阻まれたり壁にあいている穴を通ったりと道程探索にかなり手間取ったけど、黒猫とひたすら愚痴りあってただけなので割愛する。

しかしてこの部屋。僕の予想外の物があつた。

「あれ。あんた達何してるの？」

「……えー」

コンソールから手を離し、首をねじりながら振り返ったのは顔見知りの整備士だった。彼女は眉を片方持ち上げ、僕の存在を幽霊だとも疑っているみたいだ。

「僕はちよつと仙人に唆されて」

「仙人？ ああ、灯台守ね。でもあいつ唆すような奴だった？ わたしには散々北のスクラップ広場に行くって言ってたけど」

「まあ、君ならそうなんだろうなあ」

正確には僕以外なら。

「たぶん、本来あいつの役目は魔物から僕たちを遠ざけることなんだろうね。で、シグレはなんでここに？」

「このあたりに竜のマザーフレームを下地にしたブロックがあるって聞いたから、調査に」

「これがそれ？」

コントロールルームを眺める。見た目にわかるほどの異質さはない。空中に浮かんだホログラムウィンドウはなにやらせわしく色を変え文字を吐き出しているが、理解する気が皆無なおかげで意味がさっぱりわからない。

「そうだけど、ダメね」シグレは首を振った。「フレームは生きてるけど、動かす頭も体もないし。脊髓だけ抜き出して生きてるって言うようなものよ」

「まあそんなことはどうでもいいんだ」

「……あそう」

シグレは口をへの時に曲げた。黒猫が、足下でくつくつ笑ってる。それを睨み、溜息をついて、シグレは席を蹴り倒すように立ち上がった。

「悪い顔してるわね。今度は何たくらんでるの？」

「まあ、大それたことじゃないよ」

竜の体

雨が止んだ。まだ雲は空で蜷局を巻いていたが、つい先刻まで赤子のように騒いでいた灯台も今はこんこんと眠っている。

朝か昼か、それとも夜か。竜の目たる仙人は絶対時間を凍結させている。その仕事は記憶の整理になく、そこに在るものを見ることのみ。考えることが必要ない以上、すべての映像は切れ目のない動画として成立する。

ただし二度。その法則から逸脱したことがある。

一度目は流れ着いた漂流者を釣り上げたとき。

もう一度はついさきほど。本来、警告すべきところをたきつけるというエラーで応じたとき。

原因は同じ。無いはずの意志が、無いはずの手を伸ばしたため。

仙人は一人外に出た。針のない釣り竿も今はその手に握っていない。灰色の襪褌布を纏っただけで、彼は外に踏み出した。

／＊／

港湾を北に進み、粉碎されたスクラップの丘を踏みし抱く。ぐしやりぎしやりと足音は抜かるんでいる。まるで水を吸ったクラッカ―を遊びがてら踏みつけているようだ。

わざと足音をたてて歩いたことが目的地への最短距離を提示した。

一对の足音に紛れ込む、巨獣の進軍。

隠すことを知らず、覚えず、かみ砕くことだけを生業に生きた姿が、いびつな影としてせり上がる。

仙人は歩みを止め、巨大化する影を直視する。

顎をあげ、懐かしそうに眺める顔は、ねじくれた笑みをたたえていた。

／＊／

牙。それが彼女の役割だった。

竜は巨大で複雑だ。そも、規模からして通常のCBの規格を越えている。通常であれば常に変化する環境へ適応するための複雑な計算を必要とするだけで、その個体の内面維持はそこまで複雑なものではない。だが竜は違う。内側に都市を抱える箱船は、自然環境を丸ごと持ち込み維持し続けることが求められる。

故に竜は、他のCBとは隔絶した自己調整機能を持つ。

それは、己の内に存在するすべてのCBを統括制御できるようなものだった。

かくして僕や、彼女のような存在が生まれ落ちる。竜の目、竜の牙。体の部位を象徴するIDを与えられた僕たちはその役目にあり続ける。

そんな僕たちが。もしも。主たる竜を失えば？

「それが、これか」

僕の前で立ち止まった魔物は、うなり声一つ上げずに体を丸めて眠りにつく。かつて彼女を拾ったとき、マスターを僕と同じにした

ことが意味を成した。自分で自分は傷つけないのは生存上の鉄則だ。

しかしそれは、決定的な失敗だった。

竜は自己調整機能を持つ。非常時とあらば、僕が彼女を助けるのはプログラム上の必然だった。

無い知識を総動員し、有り合わせの部品を組み合わせた。けれどそれは、再現無く土地を破壊する魔物の誕生を促しただけだった。

牙の役目。外的の排除。それが正しく運営された結果である。

「さて。彼らが生きていれはうまく行くはずだが」

辺りを見回すも、送り出した者達の姿は影も形も見あたらない。

自分で自分は殺せない。直すことも僕の知識では難しい。だが他者をたよろうにも、通常のCBには近寄るなという警告がプログラム上優先される。

だからこそ。この奇跡のような好機に賭けた。

「けど……失敗だったかな」

落胆が、固まりとなって空から落ちてきて、体を縫いつける。

——そんな己を張り飛ばすように、

「さあ。魔物狩りの始まりだ！」

宣戦布告が響き渡った。

モンスターハンター2

微睡みに溶けていた魔物の意識は、その一言で帰ってきた。

瞳はない。カメラの役目は自らが果たすものではない。だが盲目だから景色が捉えられないなどと思いこむのは機能を持つが故の傲慢だ。

風の異質を理解する。いびつになった体に巻き付く風の中には、確かに異常が紛れている。

なら、碎かないと。

自らの役目を思い出す。牙はぎりぎりと言を立てながらその巨体を跳ね上げた。

以上、突進してきた魔物の心境を適当に脚色してみました。我ながら余裕のある頭だことで、その楽天っぷりに目眩がする。

「よっと」

鉄屑の山を飛び越える。足下は不安定で着地もおぼつかないが、前方へ向かう意志が他のすべてを補っている。追いつかれる前にもう一步。バランスを崩す前にもう一步。転ぶ前にもう一步。ただ前に進むと言うだけの、なんと気楽なことだろう。

そしてその後ろを、スクラップを跳ね上げながら追いかけてくる魔物が一頭。

その近くには、何か、見覚えのある姿もあった気がするけど僕が知ったことじゃない。何しろ追いかけているまっただ中。しか

も似擬切れなければ僕がスクラップ。ふざけてはいるけど結構緊急事態なのだ。

「—————！」

魔物が吼える。暴風じみた爆音がびりびりと皮膚をふるわせる。今ので詰めの代わりになるかと思ったけど、ここじゃあちよつと高さが足りない。

「ほ、よつと、」

加速をつける。頭に刻んだ座標までは残りおよそ百メートル。チーンされた今の足なら七秒きるくらいわけではない。

だが。追撃する魔物の速度はそれ以上の魔風だった。

「—————！」

「あ、やば」

魔物の鼻先が五メートルの距離で踊っている。ひっかけられたが最後、精密なマニピュレータのごとくこちらの体を顎までひきずり、僕は粉々になるだろう。

だがこれ以上の加速はあり得ない。すでにスペック上の限界なのだ。足は熱を帯びて赤く回路も焼き付く寸前だ。脚部間接も想定外の蛮用に悲鳴のコーラスをあげている。

間に合うか。追いつかれるか。

ぞくりと背筋が冷える錯覚。

最後の一秒。壊れることを前提にした急場しのぎの高速脚が、音を立てて――

「ぎゃー！」

爆発した。

聞いてない。これは聞いてない。くるくる空を吹っ飛びながら、僕は叫んだ。

／＊／

「なにをするかー！」

「あいつのことだから無茶するってわかってたしねー。これくらい派手にしなきゃつまらないでしょ」

黒猫にかみつかれながらわたしは答え、そして、とどめの一撃をさす。

「ぽちっとね」

音は口だけ。コントロールルームで監視していたわたしは、一つのプログラムを走らせる。

あいつらを助けるのに使ったのと同じ、コンテナ輸送に利用するベアリングロード輸送用回転式道路を起動した。

／＊／

スクラップはかき回されて土台を失い、大地は液状化現象を起こす。

あとはごらんの通り。蟻地獄にとらわれた魔物は、もがきながら

も大質量のスクラップに押さえ込まれて身動き一つとれなくなった。

竜の残骸

つまりこういうことだ。

竜の目である仙人は、ある日漂流してきた竜の牙を何を思ったか助けようとした。だが整備士でもない仙人にできたのは、追加パーツをでたらめにつぎはぎすることだけ。その上プログラムの根底にあったのは「竜の牙としての機能を復旧する」というオーダー。

結果、再起動した竜の牙は現在のハードへの意識の最適化を果たし、正当なる魔物への進化を遂げることとなった。

「やけに素直だねこいつは」

黒猫が仙人の背中ををいていと叩く。仙人は苦笑を決め込んでいた。

やめなさい、なんて言って聞く相手じゃないのはわかったのだからここは仙人に耐えてもらう。手が届かないという理由もあった。

僕はスクラップの丘に横になったまま、仙人はその傍らに腰を下ろしていた。事情を聞いてみたらことのほかあっさりはいってくれたのは、まあ、予想通りというところ。

「僕に素直なのは、いろいろ勘違いしてるからだよ。錯覚というか」
「気づいていたんだね」

「まあ。単に説明が付くとしたらそうかなーと思ってただけですよ」

僕のことを竜と言ったのはなかなか記憶に鮮明だ。

竜の端末である彼は、竜には素直なのだろう。

とはいえそれだと矛盾が一つ残るんだよね――。

「牙はなんで僕を襲えたの？」

「牙と爪は感覚器ではないから、独立性が強いんですよ」仙人は言った。「そのかわり指向性は強いですが。爪であれば、触れた物ともかく砕け、とか」

「なるほど」

頷きつつ、視線の向きを変える。

あー……ずいぶん派手に壊して。

「まあ、あのまま任せておけば、元の形に修復してくれると思いますよ。ただプログラムはいじれないので、元の人格に戻るかはわかりませんが」

「おそらく大丈夫だろう。竜の端末はハードが変わった時点でインシャライズするようになってる。元のハードに近づけば、仮想人格もそれに最適化する」

「普通のCBとはずいぶん違いますね」

「自我の在処が別だからね。僕たちは竜の端末という意識が強すぎる」

「そんな奴が、なんで竜から出てきたんだい？」

暇そうにしていた黒猫が口をきいた。仙人はさて、と顔を彼方に向ける。黒猫はふしゃーと言ってかみついた。……なぜ、僕に？

「答えてよ」僕は聞いた。

「……まあ、簡単な話なんですよ。わたしの母胎は死にました。そのあとランダムに行動を決定したら、ここに流れ着いた。それだけです。最初は、あの船にゴミとして運ばれてきたんですけどね」

あかしてしまえば簡単な話。聞くまでもなかったかなと、ちよつと溜息をついたり。

「あのさ」

「はい？」

「牙を助けようと思った理由は、自己保全機能？ それ以外？」
「……………」

仙人は長いこと黙っていた。

……まあ。これも、聞くまでもなかったかなと、僕は目をつむった。

脚、直してくれないかなあ……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6222y/>

海里の果て

2011年12月18日17時53分発行